

Title	独逸消費組合の近況に就て
Sub Title	
Author	高野, 岩三郎
Publisher	三田学会
Publication year	1914
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.8, No.4 (1914. 5) ,p.381(1)- 390(10)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19140501-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

原著は上下二巻大版千三百三十五頁を數ふる頗る浩瀚なる書物にして、譯者は之を九冊に分割して既に其第一冊を上梓せしが、他の八冊は本年並に明年中に漸次出版するの豫定なりと。此譯書第一冊の收むる所は原著の總論のみなり。本書は原文を追句的に譯述せる頗る忠實なる翻譯なり。されど、譯述餘りに追句的にして直譯に偏せる結果、文意明確を缺ける所少からざるは惜む可し。一二の例を擧ぐれば、一―二頁に下の一節あり。『然れどもその(國民經濟の意義)確乎たる輪廓を定められ、且つ大に判然したるは、實に社會生活の高尙なる發達に伴ひ、一面社會生活の個々方面と特殊機關と獨立し、他面社會現象に對する哲學的觀察と科學的記述と獨立したるに俟つ、』此一節の意味明瞭を缺くのみならず、譯者は原文の意を稍誤解せられたるもの、如し。次に三八六頁に曰く、『凡て觀察は、混沌たる現象界より、個々の過程を抽象し、孤

立せしめて、これを觀察す、觀察は常に抽象を基礎とし、一部分を抽象す、』云々。此外重商主義の文學 (merkantilistischen Schriften) 社會主義の文學 (socialistische Literatur) 經濟學的の文學、貨幣交通等の如き初學者をして誤解せしめ易き字句を用ゆること少からず。然りと雖も、全冊を通じて原著の眞意を傳へんとせる譯者の努力は歴然として蔽ふ可からず。譯者は帝大文科の出身にして經濟學專攻の學者に非ざるにも拘はらず、斯學の大著にして且つ反譯の容易ならざるを以て有名なるシュ氏『原論』の邦譯を大成せられたるは我學界の爲めに欣賀す可きことにして、吾人は譯者の精力に敬服するものなると同時に其成功を祝し、譯書全部の出版が豫定の如く何等の蹉跌なくして遂行せらるゝに至らんことを祈る。(高城)

三田學會雜誌 第八卷第四號

論 說

獨逸消費組合の近況に就て

高野岩三郎

千九百二年は實に獨逸消費組合の歴史上に一大時期を劃するものと謂ふべく又余輩消費組合研究者に取つて少なからざる感興を喚起するものなり乞ふ先づ數字を以て其趣を語らしめよ。

元來獨逸の消費組合は所謂産業組合の一種として發達し來れるものなり従て獨逸産業組合聯合會 Der allgemeine Verband der auf Selbsthilfe beruhenden deutschen Erwerbsund Wirtschaftsgenossenschaften の傘下に集り信用組合其他の産業組合と歩調を一にし進めり今 Schmollers Jahrbuch 昨一九一三年分に掲げたる W.F.H.s の論文に依り進

歩の跡を尋ぬるに一八六四年には消費組合の數僅に三十八組合員の數七千七百〇九人に過ぎざりしが驟々として殆んど絶えず増加し約四十年後の一九〇一年には組合の數は約十六倍して六百三十八組合員の數は約八十二倍して六十三萬七百八十五人となれり然るに底事を旭日の勢を以て進める此組合は翌一九〇二年には俄然組合數三百三十二組合員數三十萬七百二十一人に降り一九〇三年には更に減じて組合數二百五十一組合員數二十四萬八千四人となり然かも又其以後増進の勢微々として振はず約十年を隔てたる一九一一年に至り組合數二百七十三組合員數二十七萬九千六百四十五人となるに過ぎず

獨逸産業組合聯合會所屬消費組合

年次	組合數	組合員數	年次	組合數	組合員數
一八六四	三八	七、七〇九	一八六五	三四	六、六四七
一八六六	四六	一四、〇八三	一八六七	四九	一八、八八四
一八六八	七五	三三、六五六	一八六九	一〇九	四二、二八六
一八七〇	一一一	四五、七六一	一八七一	一四三	六四、五一七
一八七二	一七〇	七二、六二二	一八七三	一八九	八七、五〇四
一八七四	一七八	九〇、〇八八	一八七五	一七九	九八、〇五五

一八七六	一八〇	一〇一、七二七	一八七七	二〇二	九九、八六二
一八七八	二〇二	一〇九、五一五	一八七九	一九一	一三〇、七七七
一八八〇	一九五	九四、三六六	一八八一	一八五	一一六、五一〇
一八八二	一八二	一三〇、〇八九	一八八三	一七二	一一〇、四三三
一八八四	一六三	一一四、四二三	一八八五	一六二	一一〇、一五〇
一八八六	一六四	一四四、五〇四	一八八七	一七一	一五四、四六〇
一八八八	一九八	一七二、九三一	一八八九	二三八	一九二、四八六
一八九〇	二六三	二一五、四三〇	一八九一	三〇二	二二九、一二六
一八九二	三四四	二四三、五二九	一八九三	三七七	二六四、一八五
一八九四	四一七	二六八、三八〇	一八九五	四六〇	二九二、〇七七
一八九六	四六八	三二一、一八六	一八九七	四八九	四〇三、八七二
一八九八	五二二	四三一、四三九	一八九九	五三四	四六八、九九二
一九〇〇	五六八	五二二、一一六	一九〇一	六三八	六三〇、七八五
一九〇二	三三三	三〇〇、七二一	一九〇三	二五一	二四八、〇〇四
一九〇四	二五二	二五五、九一六	一九〇五	二六〇	二三八、〇九七
一九〇六	二六五	二四六、九四五	一九〇七	二七一	二五二、六一八
一九〇八	二六六	二五七、〇八二	一九〇九	二六五	二六二、五二二
一九一〇	二七一	二七〇、四三七	一九一一	二七三	二七九、六四五

如此く聯合會所屬消費組合増進の趨勢の頓挫せるは蓋し一九〇二年多數の組合が袖を列ねて聯合會を脱し翌一九〇三年五月ドレスデン市に新聯合を組織した

るに基く新聯合は名けて獨逸消費組合中央會 Der Zentralverband deutscher Konsumvereine と稱せられ本部をハムブルヒ市に置くこととせり然して此新聯合團體に屬する消費組合の發達を窺ふに其進歩の程度頗る著しきものあり下掲の數字は明かに吾人に此事實を語る、即ち未だ十年ならざるに組合數は八割餘組合員數は一倍二割餘を加へたり

獨逸消費組合中央會所屬の消費組合

年次	組合數	組合員數	年次	組合數	組合員數
一九〇三	六二三	五七三、〇八五	一九〇四	七一〇	六四六、一七五
一九〇五	七八七	七一五、九二九	一九〇六	八六五	七七六、九九九
一九〇七	九三九	八七九、二二一	一九〇八	一、〇二一	九六六、九〇四
一九〇九	一、〇六八	一、〇四七、九七五	一九一〇	一、一〇三	一、一七一、七六三
一九一一	一、一三四	一、三三三、四二二			

更に尙ほ兩組合の組成分子を見るに中央會派の消費組合は重に勞働者より成り聯合會派の消費組合は亦多くの勞働者を含めども役員並に獨立業者に屬するもの少からざるなり、されば前者を指して下流階級者の消費組合と稱し得べしとせば後者を呼んで中流階級者の消費組合と云ふて可なり之を His の擧げたる統計

を以て示すときは其狀下の如し

消費組合組合員職業別(一九一一年)

組合員百中	獨立業者		自由業者		勞働者		無職業者
	工商業	農業	及び役員	工商業	農業	業	
聯合會派消費組合	二二・二	四・一	二七・六	三三・〇	四・二		八・八
中央會派消費組合	六・二	一・七	三・七	七七・六	二・二		八・六

又聯合會派の消費組合は其共同動作に缺くる所あり相互の聯絡親密ならざるに反し、中央會派の消費組合は更に一致して共同利益を進むるに努め其趣恰も英國に於ける「ロツチデール」式消費組合の進化の跡を追ふものに似たり、即ち中央會派の組合は一八九四年以來「ハムブルヒ」に成立する消費組合共同購買會社 Die Gross-einkaufsgesellschaft deutscher Konsumvereine を利用し各組合の需要を纏めて此會社より盛に買入れをなしつゝありされば此會社は一九〇三年の頃より業務盛大に赴き一九一一年には千二百九十七人の人員を使用し其販賣高は一億九百六十萬五千四百六十九馬克に昇り此會社より買入れをなしたる消費組合の數は千五百七十四に達し皆に「ハムブルヒ」伯林其他合計七箇處に店舗を有するのみならず更に自

家製造に著手し既に三箇の煙草工場並に各一箇の石鹼工場及珈琲焙炙所を經營し又銀行部の設けある有様なり而して此會社は今や中央會派の消費組合の勢力圈内に入りて其共同購買共同生産其他の共同機關たらんとするの形勢に在りとす

要之獨逸の消費組合は元と一團となりて産業組合の内に同居せしが近來分れて二派となり一は依然として産業組合聯合會に屬し、一は別に獨立して單純なる消費組合の聯合體を作る一は下流労働者の組合と稱すべく他は中流役員連の組合と觀すべし、前者は組合の聯合疎漫にして後者は其聯合鞏固なり前者の景況萎微して振はざるに反し後者は隆々として盛況に向ひつゝあり

これ果して何の故ぞ偶然の事情に因て然るか抑も又彼等は何が故に分裂したるか分裂は感情の衝突に基けるか否余を以て之を觀れば分裂は感情の衝突にも因るべし然れども眞の原因は分裂が事態當然の成果たるに在り分裂後の二派の消長は偶然的事情の影響もあるべし然れども主としては、事物自然の道行に基くなり請ふ少しく之を説かん

夫れ獨逸の産業組合は元と所謂中流階級者保全策として起り爾來今日に至るまで此主義を以て一貫せり又かくありてこそ始めて各種の組合が皆同しく一傘の下に集りて一致共同の運動をなし得るなれ即ち獨逸の消費組合は亦初めて中流者によりて設立せられ役員連を中堅として發達せり從て又産業組合聯合會の中に入りて他の組合と歩調を共にするを得たり然るに元來消費組合なるものは總ての階級者に對して效益を及ぼし得れども殊に下流労働者階級に向つて功用を發揮するものにして彼等の間に消費組合の設立せられ發展するの日は則ち此組合の眞の發展階級に達したるものと稱し得べき事は余輩の茲に喩々するを要せざる所なり又抑も消費組合は中間商業殊に小賣業並に小工業の類を排斥するの運動とも稱し得べきものなり從て消費組合が小商工業者の組合と親善の態度を持して提携するは至難事たり但し中流階級者は固り之を上流者に比すべくもあらねども其需要する所既に可成り複雑多岐なるが故に共同購買に不便もあり又利益も少なし、從て又其結べる消費組合が小商工業者と衝突することも左して甚しからずとす反之下流労働者間に消費組合發達するときは兩者の利害の牴觸

や直接にして且深大なり而して若し余輩の如上の言にして正しとせば獨逸の消費組合が中流者を中心として成立し且尙ほ未發達の域に在りし時代に於ては他の組合と手に携へて一堂の中に住するを得たりと雖時勢の推移と漸く労働者間に於る消費組合の發展を促進し殊に從來此組合の效用を認識せざりし社會民主黨が其態度を一變して消費組合の發達に力を盡する至りてより一層益々進歩の趨勢を助長せり大猿幼なれば之を一屋の内に飼ふべし、一旦成長すれば嬉々として遊樂せしむること難し、成長の域に向へる新労働者の消費組合は到底産業組合聯合會の加ふる束縛に堪へ得べからず是に於て乎遂に千九百二年の分裂となれり則ち分裂は事物自然の道行なり物が落付くべき所に落付けるなり決して怪しむに足らずと謂ふべし然り而して分裂に於る兩派組合の勢力の消長も亦大體に於て事物自然の潮流に乗ずるに至れる當然の結果なりと解釋して誤なしかの英國に於る消費組合は労働者の間に起り労働者中心の組合として發達を遂げたり獨逸に於る消費組合は初め中流者の間に起り遂に今や一轉して亦労働者中心の組合たらんとす兩者發脚點を異にして然かも遂に發展の趣を一にするに

至れりこれ豈偶然の出來事ならんや

獨逸消費組合の近況は帝に如此く英國の史實と比べて興味あるのみならず又之を本邦に於て産業組合の現狀に照査して大なる教訓を與ふるものと謂ふべし蓋し我産業組合が其形骸精神共に範を獨逸に採り之に關する法律も亦獨逸の法律を母法としたるは言を俟たず但し獨逸の産業組合法に於ては特に消費組合なる名稱を認め之を法文の中に掲ぐるにも拘らず我當局者は消費組合の性質其重要を認識せざりしにや又英國に於る消費組合の進歩を知得したりしにや將た又然らざりしにや全其間の消息を詳かにせずと雖兎に角産業に必要な物を購買して之を組合員に賣却する所の所謂原料購買組合と生計に必要な物を購買するための消費組合——換言すれば生産の方面に關する組合と消費の方面に關する組合——とが共に物品共同購買の點に於て同一なりとの形式的理由に拘はりて二者を合して購買組合なる一名稱を與へたるは立法の改良にあらずして一大改惡なり從て又産業組合の統計に於ても購買組合なる名稱に固著して消費組合と他

の購買組合とを區別して數字を掲げず又之を區別するに努めざるの風あるは余輩の太だ感服せざる所なり、こは餘論として暫く度外視し本邦に於る消費組合の現状は漸く中流者の間に成立の端緒を告げたるに過ず眞の發達は之を尙ほ將來に期せざるべからず然りと雖將來に於て勞働者の間に消費組合の成立し生長するの時に及び産業組合の名稱に執著して強て他の組合と歩調を一にし行動を共にせんとするが如きことあらば獨逸に於るが如く亦分裂も起るべく無用の事論衝突も免かれざるべし是れ余の今より豫言して敢て憚らざる所、吾人宜しく此點に留意して無益の論争精力の費消を避るに努めざるべからざるなり

十七・十八兩世紀に於ける和蘭經濟學說 (其一)

福田 徳三

小引

本文の敘述に入るに先ち予が試みに作れる次の蘭・英・日對照經濟學年表を一見せられんことを乞ふ。此表は極めて杜撰なるものなれども予が兼てより作成を志しつゝある東洋經濟學比較年表の第一著手にして漸次に伊、佛、西、獨竝に支那を之に書加へて東洋と西洋と又た歐洲の國と國との間に於て我が經濟學が如何なる發達を經來りしかを一目の下に綜覽せしめんと欲するものなり。和蘭のウセリックス、グロイチウス、英吉利のトーマス・マン、我が本佐錄の著者(本多正信又は藤原惺窩)とが粗時代を同じくして共に十七世紀經濟學の劈頭に立つこと、和蘭のドラクール、英吉利のカルベラー、我邦の熊澤蕃山の何れも「コムテムポラリー」なること、英のダヴナンと我新井白石と蘭のル・モアンド・ド・レスピンリ、カールド、ル・ロンと我太宰春臺と共に同時期に屬すること、蘭のルツツク、ベステルと英のアダム・スミスと我三浦梅園、並井上四明從來誤て土井濤とと同時に生れたること、英のマルサスと我佐藤信淵とが僅かに若干年を隔て、生れたること、英のリカルドと我佐藤一齋最博士の祖父に當れりと聞きたることあり若し事實なりとすれば我邦學者中と同年に生れたること等は何れも最極端な否リカリアンたりし田口博士の因縁する所漢からずと云ふ可しと同年に生れたること等は何れも多少の興味ある事實ならずや。